

# 最初期キットラーにおける教育と核家族

## 第一論文「教育は啓示である——レッシング演劇の家族構造について」読解

松 井 健 人

### 1 はじめに

フリードリヒ・キットラー (1943-2011) はこれまで、ドイツのメディア理論家として主に『グラモフォン・フィルム・タイプライター』(1986)あるいは邦訳が待たれてきた『書き込みシステム1800・1900』(1985)の著者として紹介されている<sup>1)</sup>。また国内外のキットラー研究においても、中期以降のメディア理論家としての側面に着目がなされてきた<sup>2)</sup>。とはいえ、キットラー自身はドイツ文学者としてキャリアを始めており、1997年のインタビューでも「ゲルマニストだったころ」と語るように<sup>3)</sup>、キャリア初期においてキットラーは自意識およびその著作内容においても、たしかにドイツ文学者であった。

しかし、初期キットラーの著作はこれまであまり着目がなされてこなかった<sup>4)</sup>。近年のキットラー研究において定評ある研究書・論集などにおいても、キットラーに関する記述・考察は『書き込みシステム1800・1900』以後の著作を中心になされている<sup>5)</sup>。とはいえ、キットラー独特の背景理論の参照方法あるいはその著述を前にして求められるのは、キットラー本人がキャリア初期からどのような経緯をたどって中期以降のメディア理論家として立ちあられてくるのか。そのあり方を解明することであろう<sup>6)</sup>。

この点に関して、初期から中期のキットラーにおける文学研究とメディアの関わりについて考察した梅田拓也の研究は貴重なものである。しかし、梅田の研究も本稿が検討するキットラー第一論文「教育は啓示である——レッシング演劇の家族構造について」については扱っていない<sup>7)</sup>。また、メディア史記述者としてキットラーを経年的に考察したものに、クリスティアン・ケラーによるドルフ・シュテルンベルガーとキットラーとの浩瀚な比較研究がある<sup>8)</sup>。マールバッハ・ドイツ文学資料館のキット

ラー手稿史料も活用し、キットラーのメディア史記述の思想史的・同時代的文脈について考察したものであるが、「教育は啓示である」論文についてはほとんど言及されていない。さらに、初期キットラーに関連する研究として、松井健人は、1978年の「詩人・母・子ども」から1985年の『書き込みシステム1800・1900』に至る著作の中で、キットラーがフロイト的な精神分析を批判的に検討する意図をもってアリエスを参照し、家族の歴史的形成・その存在の非自明性に目を向けた点を明らかにしている<sup>9)</sup>。この知見は本稿にとっても重要であるものの、キットラー第一論文である「教育は啓示である」は検討されておらず、またアリエス参照にいたる同時代の思想史的背景についても十分な考察はなされていない。

本稿は上述の問題意識を踏まえて、1977年にキットラーが最初の学術論文として『ドイツ・シラー協会研究年報』に発表した「教育は啓示である——レッシング演劇の家族構造について」を読解し、その論理構成ならびに参照される知見のコンテキストを明らかにする<sup>10)</sup>。キットラーが後年見せる型破りな記述を考えれば、学会誌の研究論文という性質をもつこの論文は、初期キットラーが考えていた問題系を幾分か明瞭に示してくれるだろう。ゆえに本稿は、「教育は啓示である」を精読しこの論文の論理構成を追いつつ、キットラーが随時用いる精神分析家ラカンや歴史学者フィリップ・アリエス、あるいは反精神医学の旗手デーヴィッド・クーパーらの知見が、どのような論点を彼に提供しているのか、そしてこれらの知見が有した同時代的意義について検討する。

また教育学において、キットラーは補足的に参照されることはあっても、キットラーの知見を応用ないしは受容する試みはほとんどなされてこなかった。先駆的な研究として、キットラーの知見を啓蒙期ドイツ教育思想の身体論的解釈への応用を目指す

弘田陽介の研究を挙げることができる<sup>11)</sup>。しかしそもそも、キットラーが教育をどう捉えていたのかについては意外にも明らかではない。本稿はキットラーが近代の教育をどのように捉えていたのかについても解明してゆく<sup>12)</sup>。そのためにも、「教育」(Erziehung)が明示的に検討課題となっている本論文は、貴重な考察対象であろう。以下では、第二節で第一論文の概要を紹介し、第三節では、その背景にある当時の理論状況と第一論文との関係性を示す。これらの検討を経ることで、キットラーがどのような問題構成から研究を開始したのか、その時の背景理論にはどのような布置が存在したのかについて明らかにしていきたい。

## 2 「教育は啓示である——レッシング演劇の家族構造について」(1977)

### 2.1 「教育は啓示である」の目論見

本節では、キットラーが「教育は啓示である」において、どのような構想をもち、レッシング演劇を読解しようとしているのか、そのあり様を明らかにしたい。

「『家族の死』に関する話題は、家族の誕生に関する文学的証拠を再び読むことを有益にしている」(S. 111)。以上が、最初の一文である。ここで「家族の死」に対してキットラーは脚注をくわえ、『家族の死』を挙げている。この著作は、反精神医学の旗手として知られ、『引き裂かれた自己』で知られる精神医学者レインと共に活動したデイヴィッド・クーバーの手によるものである<sup>13)</sup>。つまり、キットラーは家族の死、とりわけ精神分析・精神医学の文脈から提起された「家族」という構造・制度の役割の終焉、という主張に目を向けながら、レッシング演劇を家族の視点から読み解こうとしていく。

キットラーはレッシング演劇における家族構造に着目して分析を行う。しかしそれは、文学作品をマクロな社会的関係の反映として読みとくような文学社会学(Literatursoziologie)ではない。そうではなく、市民的家族の系譜から、一貫した構造の中において、レッシングの演劇を理解することが目指される。つまり、市民的演劇は社会構造の反映でもなく、精神史的理念の表現でもなく、同時代的生活様式を整備するのに寄与するような、記号=症候の技術(Semiotchnik<sup>14)</sup>)であるのだ(S. 111)。

キットラーは、アリエス『〈子供〉の誕生』の「日常的な悩みや喜びを分け合うような家族は、最も高次の意識の領域における基本的な慣行から出現した<sup>15)</sup>」という言葉を引用しながら、レッシング演劇とりわけ『ミス・サラ・サンブソン』(1755)、『エミーリア・ガロッティ』(1772)、『賢者ナータン』(1779)(以下、『サンブソン』、『ガロッティ』、『ナータン』)においてこの記号=症候が示されると述べる。彼によれば「レッシング演劇が当てはまる決定的な契機は、血縁家族(family of generation)から生殖家族(family of procreation)へと、年ごろの娘が移行する事なのだ」(S. 113)。

### 2.2 血縁家族の構造<sup>16)</sup>

レッシング演劇における家族構造の決定的な契機は、血縁家族内の娘が生殖家族へと移行する所にある。このように述べるキットラーは、『ガロッティ』を例にとりながら、「血縁家族はレッシングにおいては夫婦の核家族である」と述べる。レッシング演劇ではこの血縁家族とは、父と母と「一人きりの娘」(『ガロッティ』第2幕第4場)からなる家族である<sup>17)</sup>。このような家族形態は、ハーバーマスが『公共性の構造転換』で記したような、18世紀以前の家族の住居内に住む家庭教師の存在あるいは貴族階級にみられたような夫婦が別々の邸宅に住むといった形態とは異なる、極めて近代的な在り方であった(S. 113)。

キットラーは父オドアルドが発言する次の場面を、家族像を端的に示したものとして引用する。

お前 [エミーリアの母であり自分の妻であるクラウディア] は私の古い疑いをまたよびます。私たちの娘に立派な教育を与えるという必要よりも、にぎやかさと気晴らしのため (das Geräusch und die Zerstreung der Welt)、宮廷の近く (die Nähe des Hofes) にいたがために、あの子と一緒にこの都市に留まったのではないか。——お前たちを心から愛している夫であり父である自分から遠く離れて。(『ガロッティ』第2幕第4場) (S. 114)

キットラーが続けて言うには、「家族とは、「世間(Welt)」と「宮廷(Hof)」という代表的具現の公共圏(repräsentative Öffentlichkeit)に対抗する、

集住の場所の事を名指している」(S. 114)。そして、演劇の視点は、核家族の内的視点である。核家族は、外部から親密圏として区切られているために、その内部空間においては、私的なものと公的なものの差異の余地は残されていないのである。

これは例えば『ナータン』において以下の様に、メタコミュニケーション的な約束が達成される点に現れる、とキットラーは言う。ナータンは次のように娘に約束を交わそうとする。「約束をしてほしい。もしおまえの心がもっとはっきりした時には、お前の望みを包み隠さずに話してほしい」。しかし、娘のレヒヤの返答は「私の心をお父さんに話すと考えただけでも、ぞっとする！」であった(『ナータン』第2幕第4場)。確かに、包み隠さずに話したくない、という望みを包み隠さずレヒヤは伝えているのだ。

家族の性質について、レッシング演劇の引用を交えながらキットラーは、家族における父の存在様態について分析を加えていく。例えば、エミーリアとアッピアーニとの婚姻に関して、父オドアルドは次のように述べる。「あの子たちは、お互いにとって定められた相手を見つけたのだ。だから、純潔と平静があの子たちをよぶ所へ行かせればいい」(『ガロッティ』第2幕第4場)。ラカンを参照するキットラーによれば、この父の言葉は、近代の核家族の文化、家族ならびに結婚の基本的関係性を象徴している<sup>18)</sup>。続けて、ハーバーマス『公共性の構造転換』を挙げながら述べるには、「夫婦の、そして愛の自由な選択からなる新しい家族の形を、父の言葉が築く」(S. 116)のだ。

ラカンとハーバーマスを自由に参照するキットラーが見出すのは、近代核家族形成において、男性-女性(夫-妻)間における愛の選択が、近代核家族形成にかかわる根本的な要因となるという事態である。劇中では、生殖家族への娘の移行を巡って、両親間で議論が起こる。

クラウディア「このことを思うと、胸が張り裂けそう。たった一人の愛娘を失わないといけないなんて？」

オドアルド「失うとは何だ？ 愛する人の腕に委ねることじゃないのか？ 娘を可愛がることと、娘の幸せを一緒にしてはならないぞ。」(『ガロッティ』第2幕第4場)

両親にとって、子どもは代えがたい所有物(Besitz)である。この時、母が「胸が張り裂けそう」と心情を表明していることは、母自身が現実の家族における感情的な結びつきを保証するような審級(Instanz)として機能していることを示している。これに対して、父は核家族の構造を代表する審級として存在する。オドアルドは、娘に対する両親の視点よりも娘自身の視点を優先させる。父は娘の幸せを願うのであるが、その幸せは紛れもなく核家族の幸せである。「あの立派な青年を私の息子と呼ぶのを待ちきれない。彼の全てが私を夢中にする。とりわけ、彼の父方由来の谷の土地で生活しようという決心がね。」(『ガロッティ』第2幕第4場)。一方、血縁家族の親密圏に由来し、それがために代表的具現の公共圏の光に照らされることのない娘は、生殖家族の親密圏へ移行する閾に立っている(S. 116-117)。以上のような父と母と娘の様態は、生物的な再生産を担う家族というものが、文化的に再生産されなくてはならない、という構造を示している(S. 117)。

なお、キットラーは第一論文において、「核家族(Kernfamilie)」を特段の定義なしに用いている。キットラーは上の父オドアルドの言葉の引用の後に以下のように述べる。「父は、核家族の感情的な中心となる母に対置する存在であり、形式的な社会学者たちがみなすような、道具的な指導者(instrumentaler Führer)や超家族的なエージェントではない。父はむしろ、それぞれの核家族の中において、その原理的な規則のエージェントである。父オドアルドの言葉は、家族が、生物学的な再生産の場所であると同時に、それ自身が常に文化的に再生産されることを示している」(S. 117)。この時、形式的な社会学者として揶揄気味に引用されているのがタルコット・パーソンズ『家族』である<sup>19)</sup>。パーソンズに対するキットラーの見方が正当であるかは本稿では問わないが、キットラーが、核家族を形式的に理解したり、あるいはその家族内部の力学を捨象することに対して異議を唱えていることが見て取れるだろう。

キットラーによれば、このような家族の構造は、レッシング演劇に通底している。「父とは、子どもに対して、両親への愛を他者に対する愛として転移させることを可能にする者なのだ」(S. 117)。先のオドアルドの叱責とクラウディアの所有愛は、自身

が家族の生産物であると認識している、サラ・サンブソンの口からも語られる。

運命によって父が亡くなったとしても、私の良心は、お前がいなければ父はもっと長生きできただろう、という誹りに対して歯向かえないでしょう。もし優しい母が私を導いて下さったならば、私はあさましい咎を犯すことも無かったでしょうに！ 母の教え、母の手本が私の心を…。メルフォント、優しい目で見つめていますね？ もし私の母が生きていたなら、たぶん愛情で私をがんじがらめにしていたでしょう。そして私があなたと結ばれることもなかった。純粹に善意から、より賢明な運命が私に与えずにいていたものを、どうして私が望んだりするでしょう？ 運命の摂理こそいつも最良なので。運命が下さったものを正しく用いましょう。私の父は、一度も母がいらない寂しさを感じさせたりはしなかった（『サンブソン』第4幕第1場）。

父は子どもを開放するのではなく、新しい家族形成へと子どもを導く存在なのであった。父の利己的でない愛は、子どもに対して以下の様に作用する。つまり、母「の」(*der Mutter*)「がんじがらめにするような愛」によって帰納された、母「への」(*zur Mutter*)子どもの愛を解除するのである (S. 118-119)<sup>20)</sup>。

### 2.3 精神的父と教育者

『ガロッチィ』と『サンブソン』の分析を踏まえ、キットラーは『ナータン』の分析に移る。『ナータン』とは、サラ・サンブソンが口にした「より賢明な運命」が満たされた演劇なのだ。賢者ナータンはユダヤ人であるが、キリスト教の洗礼を受けた娘であるレヒャ（レヒャ自身はこのことを知らされていない）を養子にしている。核家族が今一度、縮減されているのだ。父であるナータンが文化的再生産の全機能を受け持っている。

『ナータン』の劇の進行においては、精神的な父が母の所有愛から娘を開放するところに本質がある、とキットラーは見る。養子縁組と父による認知を経た父-子-関係の構造は、「純粹な記号表現<sup>21)</sup>」である (S. 120)。これに続けてキットラーは『ナ-

タン』的一幕を参照する。「血、血だけが長らく、父を作ってきたものではない！ 動物だって同じことだ！ せいぜい、父と名乗る最初の権利があたえられるだけだ！」（『ナータン』第5幕第7場）。つまり、「父」とは単なる「名」なのだ (S. 120)。父による養子という構造は、ナータンとレヒャの家族構造を強く規定している。ここでマルクスを参照するキットラーによれば、「農奴は土地の付属物である。同様に、長子相続権者つまり長男は土地に付属している。土地が長男を相続するのである<sup>22)</sup>」とされている所を、養子を組むことによって、この家族は土地の規定からも逃れているのである。

市民家族は、一つの生産物であるとともに、文化の生産地でもある。市民家族は「人間」(*Menschen*)を生産するのであり、この際に「教育」(*Erziehung*)が必要となる。キットラーによれば、18世紀において教育にかかわる学術が進展したことは偶然ではない<sup>23)</sup> (S. 121)。市民的教育が被教育者に書き込まれると、被教育者らはその教育を「自然」と名付ける。教育は人間を「とてもつましくて正しくて、とても自然に」（『ナータン』第5幕第6場）する。教育において、暴力の痕跡は消え去るべきものであり、これは劇中で総大司教が「子どもに加えられることはすべて暴力なのだ。もっとも、教会がすることは別として」（『ナータン』第4幕第2場）と述べる通りである (S. 123-124)。

キットラーは教育の性格付けを行いつつ、レッシング演劇にその記号=症候を辿って行く。彼によれば、市民的教育は実のところその客体（被教育者）に本質が存在するのではなく、教育の行為主体（教育者）に本質がある。「教育は個人を創りだすのではなく、教育は核家族の構成員を創りだす<sup>24)</sup>」 (S. 125)。

教育行為において本質が存在するという思考は、レッシングにおいて、彼が宗教史を人類の発展過程になぞらえた歴史哲学的著作である『人類の教育』で遂行されるという。ここでキットラーは論文のタイトルとなった『人類の教育』の「教育は啓示である。この啓示は、個人に対して生起するものである」（*Erziehung ist Offenbarung, die dem einzelnen Menschen geschieht*）を引用提示する (S. 125)。

キットラーは『賢者ナータン』に伏在していた、近代の家族と教育との結びつきを、ラカンの精神分析、アリエスの歴史学といった多様な知見を援用し

ながら、読み解いていくのであった。

## 2.4 教育の産物と、婿を養子とすること

かくして、キットラーによれば家族とは「なによりもまず人類学的なものであり、歴史的なもの」である (S. 125)。家族が核家族へと縮小していくのと同じくして、核家族はより少数の子どもの教育活動へと集中し、それを通して子どもをかけがえのないものとする。キットラーがラカンの言葉を借りて言うには、核家族において教育活動が行われるときには「才能と傾向性に関する積極的な淘汰、ならびに性格における理想の漸進的な実現を伴っている<sup>25)</sup>」のだ (S. 127)。

しかし、核家族と教育との結びつきは完全無欠ではない。キットラーは以下のフーコーの『精神疾患と心理学』の長文を引用する。「ルソーとベスタロッチとともに18世紀は、子どもの発達段階に沿った教育的原則を通して、子どもの尺度に応じた世界を作りだそうと努めた。この時、その目的のために、大人の世界とは関係のない、理想的な・抽象的な・原始的なミリューをつくるのが許された。[...]」しかし、教育学が子どもを葛藤から避けさせたがために、子どもをとりわけ大きな葛藤、すなわち子ども時代とその実際の生活との間の矛盾にさらすことになった<sup>26)</sup> (S. 128)。

核家族の子どもと代表的具現の公共圏との衝突は、『ガロッティ』において、エミーリアを狙うグアスタッラ公の策略として表れる。グアスタッラ公は、下手人を用いて婚約者アッピアーニを殺害し、エミーリアを彼自身が所有する館へと誘いこむ約束を取り付けることに成功する。この「逸楽の館」への誘いに対してエミーリアは恐れおののき、最終的には彼女に死の結末をもたらす。キットラーはこの恐れが、市民的人間の生産 (Menschenproduktion) の限界を表明しているのだという (S. 128)。

核家族と代表的具現の公共圏の衝突のなかで、新しい文学的登場人物のタイプが発生している。それは、理想的父を追い求めるといふ望みにとりつかれ、それがために自身の欲望が無力されている誘惑者 (Verführer) である。誘惑者は、許されうる可能性をもち、かつ後悔する人物である (S. 128)。この人物造形は、「おお、ガロッティ、あなたが私の友、私の導き手 (Führer)、私の父になってくれさえすれば…」(『ガロッティ』第5幕第5場) という、

悲劇突入前のグアスタッラ公の最後の言葉に象徴されている (S. 128)。

その一方、核家族の父は、婿を養子として、自らの家族体系に組み込み、核家族を再生産しようとする。エミーリアの婚約者であるアッピアーニは、エミーリアの父に魅了されて以下の様に感嘆する。

いま、私がお父さまの抱擁から身をはなしてきたところです…。いえ、むしろお父さまが私の抱擁から身を離されたのです。ああ、なんて素晴らしい人だ。エミーリア、あなたのお父さまは！ すべての男子たるものの徳を備えたお方！ お父さまの前では、私の魂が高められるのです！ お父さまを見るといつも、いやお父さまのことを考えるだけで、常に善く高貴であろうという私の決心が新たになるのです。この決心を満たしていくこと以上に、お父さまの息子を名乗るといふ名誉、つまりあなた方ものになるという事にふさわしいことがあるでしょうか？ (『ガロッティ』第2幕第7場)

フロイトの「自我とエス」を参照しながらキットラーが言うには、アッピアーニには、「父親憧憬に代わる代替形成物」としての「自我理想」(Ichideal) が発生しているのだ<sup>27)</sup> (S. 129)。

## 2.5 家族と文学心理学

上述のように、キットラーはレシグ演劇を読みながら、精神分析、歴史学などの知見を参照し、核家族と教育、そして家族内における父の象徴的機能について検討を行う。

まず、家族におけるコミュニケーションの在り方について。『ガロッティ』の最終場面での父・娘の関係性、エミーリアが父オドアルドに自身を短剣で刺し殺すように訴えかける第5幕第7場での父と娘のコミュニケーションが、この関係性がよって立つ法 (Gesetz) を明るみにしているという。この場面では、「(肉親=生身の) 父に対する娘の願いは、(理想の) 父の法であると同時に、(肉親=生身の) 父の法は、(理想の) 法にむけた娘の願いなのである」(S. 131)。つまり、エミーリアが父オドアルドに期待することは、理想的な父が娘に対して期待するようなことを、父オドアルドが娘エミーリアに対して期待することなのだ。

核家族は、家族の内の誰もが誰に対しても一員であるような集団になった。このようなコミュニケーション様式が、家族を歴史的に新しい間主観性の範例としたのであった (S. 132)。かくして、以上のような核家族という基礎的な血縁関係性に端を発する形で、文学の新しい参照学問としての心理学が登場する、とキットラーは心理学と文学の関係を位置づける。

## 2.6 ファンタズマと父の裏切り

演劇の結末部にて、『サンブソン』、『ガロッティ』には娘の死が、『ナータン』では近親相姦禁止ゆえの結婚の禁止が発生する。生殖家族と未来が共に消えていくのである。このような結末部で発生しているのは、父の名の下での家族の統合である、とキットラーは纏める。これに続けて述べるには、「一人の、理想の父とはすべてファンタズマ (Phantasma) である<sup>28)</sup>」(S. 134)。

レッシング演劇では、家族に対して課題が書き込まれている。その課題とは、縁組を通して人間性をつかみとることと、「本当のユートピア」としての親密性を再生させることである。しかし、この課題もまたファンタズマであるとキットラーは結論付ける。この課題の実行を行う中で、全く反対の事が示される。文化的な結びつきの象徴的な秩序が家族の中で打ち立てられるのではなく、逆に交換とコミュニケーションの法によって、家族が基礎づけられていることが判明するのである<sup>29)</sup>。このことは、レッシング演劇においても『ナータン』の指輪の寓話が明示しているのだという。

劇中でサラディンにキリスト教・ユダヤ教・イスラム教のどれがもっとも真実なのか、問い詰められた賢者ナータンは、三つの指輪をめぐる寓話を披露し、サラディンを逆に魅了する。この寓話の中では、一人の父親から三人の息子への指輪の相続が問題となっている。父親は、三人の内、もっとも愛する息子一人に指輪を譲らなければならなかった。父親の持つ指輪は、所有者が指輪を信じるならば、その所有者が神と人に愛されるという効力をもつ。この意味で原父、フロイトの神話である『トーテムとタブー』に近い位相をもっているとキットラーはみる (S. 135)。しかし、寓話の父は、息子三人に対して、誰にも見分けがつかないほど本物そっくりに作らせた指輪を二つ混ぜて、相続させてしまう。父は裏

切ったのだ。

ただ時折、一人だけが父と向かい合い、他の二人が父のあふれる愛情を共に分かちあえないとき、目の前の息子だけが指輪にふさわしいように父には思われた。だから結局、誠実ゆえの弱さから、どの息子にも指輪を与えると約束したのだった (『ナータン』第3幕第7場)。

この時、市民的家族の内部において愛と親密性の夢と、配分の法との衝突が発生する (S. 136)。父の配慮を裏切る形で、息子たちのナルシズムが生まれる、とキットラーは寓話の構造を見る。父の相続をめぐる、息子たちは「父が、自分に対して嘘をつくなんてありえない、とそれぞれが断言した。これほどまでに自分を愛してくれた父に疑いを向けるくらいなら、自分の兄弟が犯した詐欺をとがめないといけない」(『ナータン』第3幕第7場)と断定する結果がひきおこされたのだった。キットラーがサーファンの言葉を借りて言うには、「自分の父に騙されるというのは、他人に騙されるのとは訳が違う<sup>30)</sup>」のだ。

では、父はなぜこのような長続きもしない嘘につき、息子を裏切るような事をしてかしたのか。キットラーは「教育は啓示である」を次の一文で締めくくっている。「市民の父の「誠実ゆえの弱さ」(fromme Schwachheit)は、父を理想の市民的人物に仕立て上げるものである。そしてこの弱さは想像上の強さの欠如ではなく、欠如の欠如 (der Mangel des Mangels) であり、それが「父」という能記・シニフィアン (Signifikant) なのだ<sup>31)</sup>」(S. 137)。

## 3 ゲルマニストとしてのキットラーと同時代的思想背景

前章では、キットラーの第一論文がどのような考察を展開したのか、キットラー論文の注釈も精査しながら確認した。本章では、キットラーが考察に用いた諸文献・理論がどのような思想的同時代性を有していたのかについて検討する。

### 3.1 キットラー論文の参照文献と共通点 家族と精神分析

狭義のドイツ文学の先行研究を除いて、同時代の思想家として、キットラーはこの学術論文の中で誰を参照していたのか。やや煩雑であるが最初期キットラーの叙述を明確化するため、ここで書名を列挙するとともに、参照部分の内容を記す。キットラーが「教育は啓示である」で、狭義のレッシング・ドイツ文学に関する先行研究を除いて、主に参照した文献は、ラカン『家族複合』（近代家族構造について）、ドゥルーズ『アンチ・オイディプス』（書名のみ）、フーコー『狂気の歴史』（市民的理性の普遍化）と『精神疾患と心理学』（教育による子どもの世界の特権化）、レヴィ=ストロース『親族の基本構造』（家族の人類学的成立について）、アリエス『〈子供〉の誕生』（近代家族構造について）、ハーバーマス『公共圏の構造転換』（近代家族と公共圏の歴史的位相について）と『史的唯物論の再構成』（父親の存在の位置価について）、クーパー『家族の死』（近代家族病理について）、ムスタファ・サーファン『オイディプス研究』（「父」の精神分析的位置付け）である。

これらの多様な参照文献の数々は、あくまで大まかな性格付けに留まるものの、以下のような共通点を有すると言えるだろう。まず、①哲学的思考・歴史的知見・人類学的見地といった多様な視点からであるとはいえ、いずれも家族の歴史的な性格を問うものであること、そして②これらの文献が多かれ少なかれ、精神分析とりわけフロイトの家族論の批判あるいは批判的継承をめざしていること、である<sup>32)</sup>。

論文冒頭に示された通り、キットラー自身が同時代の知的状況として意識しているのはクーパー『家族の死』に代表される精神医学・精神分析分野における近代家族像の見直し・超克への試みであった。クーパー『家族の死』の内容は徹底的な家族解体論であり、「精神医学者のする極北的「家族論」と評される<sup>33)</sup>。クーパーにおいて、アリエスは以下のように言及・参照され、近代家族の歴史的限定性・非自明性が主張される。「フィリップ・アリエ[訳書ママ]は意志の社会的意味に関する研究の中で、19世紀以前の家族がいかに生前ないし死後における危機的状況に個人の生活に干渉したかを示した。家族がそのメンバーの日常生活にまで侵入し、個人の日々の存在がほとんど全面的に家族の占拠する領野になって

しまったのは、19世紀中葉以降のことである、それは実際、殺人をも含めた（しばしば「赤ん坊をぶつ」という装いをとる）、われわれの社会で最も暴力的な領野なのだ<sup>34)</sup>」。

アリエスの著作は、今日では社会史・教育史の成果として受け取られている。しかしながら、アリエス自身が歴史家であることを踏まえた上でも、アリエスの家族論が受け入れられた土壌として、精神医学・精神分析があったことが重要である。この点に関して、鳥光美緒子による指摘が有益である。鳥光は、1960年代以降に子どもと社会・子どもと家族を社会的に捉える研究潮流が形成された背景として、アリエス『〈子供〉の誕生』とその英語訳ならびにアメリカでの受容を挙げる。同時に、このテーマに関する最初期の著作として、オランダの臨床精神科医ヴァン・デン・ベルクの歴史心理学の著作『メタプレティカ』（原著1956年、ドイツ語訳1960年）の存在を指摘している<sup>35)</sup>。

ベルクは『メタプレティカ』の中で、19世紀の心理学の無時間性を問題点として指摘し、モンテーニュ、『デカメロン』、ロック、ルソーらを参照しながら、子ども観の歴史的変化について考察を行った<sup>36)</sup>。ベルクはアリエスも参照している。1585年に12歳か13歳で結婚し、そこから30歳までの間に14人の子どもの産んだアルノー夫人について論じるアリエスの論文「19世紀と家族道徳の革命」（1954年）を参照しながら<sup>37)</sup>、ベルクは子どもと母親に対して、死が現代より一層身近なものであったことを論じている<sup>38)</sup>。

以上のような同時代の思想史的文脈を踏まえれば、キットラーが「教育は啓示である」で参照した諸文献は、精神分析の問題関心の影響を受けながら、「家族」の存在様態を考察した著作群という性質を有していた、と結論付ける事ができるだろう。

### 3.2 キットラーの教育理解

それでは、初期キットラーにおいて「教育」とは何であったのか。「教育は啓示である」から読み取れるのは、1800年周辺において、家族の核家族化が進行し、それにつれて、「教育」が自明視されていくという歴史的展開である。キットラーにおいては、教育と核家族は結び付いている。「教育は個人を創り出すのではなく、教育は核家族の構成員を創り出す」（S. 125）のであった。ゆえに、「教育は啓

示である」というレッシングの言葉は、まさに核家族の構成員を創りだす教育そのものが自明視され、また教育の本質が教育者側に存在しているかのようには解釈されるという事態を表現しているのであった。

勿論、キットラーは教育学者ではなく、本論で教育に関する詳細な検討が必ずしもなされているわけではない。しかしこれまでの検討から、1800年前後から進行する核家族と、不可分かつ共犯的な関係性を構築していたのが教育であった、と結論付けることができるだろう。キットラーの教育理解で重要な点は、「家族」・「教育」・「人間」といったものが徹底的に歴史的・社会的な背景に依拠した産物(Produktion)として理解されている点である。「人間」それ自体が普遍的に存在するのではなく、核家族の内部において、家族構成員生産のための手段である教育が展開する中で、あたかも自明なものとして被教育者に書き込まれるだけなのだ<sup>39)</sup>。

### 3.3 ゲルマニスト・キットラーは何を狙っていたのか 諸歴史の接続にむけて

これまでの検討で明らかになったように、初期キットラーは「教育」を一つの問題関心として抱いていた。例えば1960年代から70年代中盤にかけての初期断片遺稿集『人造湖』をみると、キットラーはBildungについてこう記している。「教育概念(Bildungsbegriff)は具体的-人類学的に捉えられなければならない。教育は文化内部での制度である<sup>40)</sup>」。後年の『書き込みシステム1800・1900』の「母の口」で描かれていたのは、母=教育者の等号が成立し、母と子の間に近親相姦的な欲望が生まれ、それがあたかも自明な存在として推移する様相であった<sup>41)</sup>。

またドイツ文学研究としても、一般的には、父親が娘の一方的な(性の)管理者・(徳・純潔の)教育者として理解されるレッシング市民悲劇<sup>42)</sup>、ならびに三宗教の融和・人類平和を説いたとしてオプティミスティックに受容されがちな『賢者ナータン』を対象として、近代家族のコミュニケーション様態の特異性を別括している点は、ゲルマニストとしてのキットラーの独自性であると言っても良いだろう。

もっとも、アナクロニズムな見方であるが、「教育は啓示である」論文時点では、あくまで論点は近

代家族の「父」に集中しており、「母」が持つ特異性への着目はまだ明示的にはなされていない。また「教育」理解に関しても、核家族内部での教育が「人間の生産」に直結する、というあくまで概念的・外挿的な理解であり、後年の『書き込みシステム1800・1900』で展開された具体的な教育手法に関する言及はなされていない。とはいえ、本稿が検討したのはあくまで最初期第一論文であり、1977年以後、狭義のドイツ文学の領域を徐々に跨いでゆく形で、キットラーは論考・著作を積極的に発表していく。それらの著作群はたしかに「1800年前後における母親と詩と哲学の歴史を接続<sup>43)</sup>」するという回路へ向かっていくのである。

## 4 おわりに

本稿で見てきたような諸文脈から総括するならば、キットラーの第一論文は、1960年代以降の精神分析を始めとした広範な学術領域において展開された近代家族論の成果を参照しながら、主にラカンを始めとした精神分析を分析の手法として、レッシング演劇を読み解いていった、と纏める事が出来る。

本稿を終えるにあたり、本研究が狭義のキットラー学説史研究を超えて、広く教育史・教育思想研究に対して持ちうる意義について述べたい。言うまでもなく、キットラーを安直に教育学領域に輸入しその価値を僭称することは避けなくてはならないが、キットラー第一論文が有した問題意識は、教育史・教育思想研究においても課題とされてきた「近代家族における父」という問題系とつながる点を有すると論者には思われる<sup>44)</sup>。

例えば、最初期ペスタロッチにおいて、父親が教育者として比重が置かれていたが、次第にペスタロッチは母に教育者としての役割を見出し、「居間の教育」(『リーンハルトとゲルトルート』(1781-87)など)を提唱するにいたる<sup>45)</sup>。このペスタロッチによる教育者としての母の提唱は、ひいては近代家族規範にも影響を与えるに至った<sup>46)</sup>。近代核家族黎明期において、教育者としての焦点が父から母へ移り変わったとみることができる。文学作品という、規範・理念に影響を与えうる言説から、核家族の様態を読み解いたキットラーの分析は、同じく核家族における母あるいは父を分析の対象とする教育史・教育思想研究に対しても有意義な示唆を与えうるだ

う。

またそのためにも、キットラー自体の研究も不可欠である。キットラーを論ずるにあたっては、後期以降のキットラーの音楽・数学論、古代ギリシア論とともに、同時代的背景ならびに問題関心が比較的プリミティヴにあらわれる初期キットラーも読まなければならないだろう。また、教育に着目した論者の問題関心としては、キットラーがドイツ教養小説（Bildungsroman）をどのように読解していたのか、は興味深い。初期キットラーはゲーテ『ヴィルヘルム・マイスター』論とトーマス・マン『魔の山』論をそれぞれ著している。これらは今後の課題である。

### 【付記】

フランス語原語の諸テキストの訳出にあたって、既存の日本語訳を参照し、キットラーが参照したドイツ語翻訳文献にも照らし合わせて、一部の日本語訳を松井が適宜変更した。レッシング演劇の日本語訳に際しては、田邊玲子氏、市川明氏の訳を参考にした。同時に、松井が適宜変更を加えた（レッシング『エミーリア・ガロッティ ミス・サラ・サンブソン』田邊玲子訳、岩波書店、2006年；ゴットホルト・エフライム・レッシング『賢者ナータン』市川明訳、松本工房、2016年）。

また、本稿作成にあたって、梅田拓也氏（同志社女子大学）に有益なご指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

### 注

- 1) 本論文投稿後、大宮勘一郎氏、石田雄一氏による日本語訳である『書き取りシステム1800・1900』（インスクリプト、2021年5月）刊行が報じられた。刊行の時期のため、本訳書の成果を議論に組み入れることはかなわないが、なによりもまず、長らく待ち望まれつづけたこの大著の日本語訳刊行を慶びたい。
- 2) 北田暁大「制度としての自由——フリードリッヒ・キットラーのメディア論の示唆」、北田暁大編『自由への問い4』岩波書店、2010年、101-127頁；Geoffrey Winthrop-Young, *Kittler and the Media*, Cambridge, 2011.
- 3) 「メディアシステムの起源」『批評空間』II-20、1999年、102-123頁。
- 4) 日本では1990年代にドイツ文学者である縄田雄二や石

光泰夫、大宮勘一郎、原克、前田良三らによってキットラーの紹介・翻訳が進んだ。とはいえ、メディア論あるいはラカンを踏まえたディスクール分析の側面に重きが置かれていた。参照、石光泰夫「ディスクール分析の功罪——身体論の回復をめざして」『ドイツ文学』(93)、1994年、1-11頁；前田良三「書物・署名・日付——ディスクール理論あるいは<解釈空間>の物質的条件へ向けて」『ドイツ文学』(93)、1994年、23-34頁など。

- 5) Geoffrey Winthrop-Young, *Friedrich Kittler zur Einführung*, Hamburg, 2005; Stephen Sale, Laura Salisbury (ed.), *Kittler Now*, Cambridge, 2015.
- 6) 梅田拓也は、キットラーのメディア論の記述に沿うならば、総てのメディアシステム、ひいてはキットラー自身の理論装置も分解されなければならないと指摘する。梅田拓也「すべての装置の電源を切ること」『メディアウム』(1)、2020年、74-75頁。
- 7) 梅田拓也「文学研究とメディア論——マクルーハンとキットラー」『リーディング』(39)、2019年、59-70頁。
- 8) Christian Köhler, *Mediengeschichte schreiben. Verfahren medialer Historiographie bei Dolf Sternberger und Friedrich Kittler*, Paderborn, 2018.
- 9) 松井健人「初期キットラーにおける家族と教育、あるいは家庭教育の誕生」『メディアウム』(1)、2020年、136-148頁。
- 10) Friedrich Kittler, *Erziehung ist Offenbarung. Zur Struktur der Familie in Lessings Dramen*, *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*, (21), 1977, S. 111-137. 以降、本稿で「教育は啓示である」を参照するときは頁数のみを記す。
- 11) 弘田陽介「母と子の間で身体が生まれる——ドイツ啓蒙教育学における「身体=メディア」論序説」『教育哲学研究』(101)、2010年、78-99頁。
- 12) なお「教育は啓示である」は1991年に論文集『詩人・母・子ども』に再録されている。本稿は基本的には1977年のものを参照している。注釈および参考文献の表記に関して、別文献の追加などの異同はないものの、再録時に一部訂正が加えられており、その箇所においては1991年の記述にしたがった。Vgl. Friedrich A. Kittler, *Dichter-Mutter-Kind*, München, 1991, S. 19-45.
- 13) David Cooper, *Der Tod der Familie*, Reinbek, 1972 (デイヴィッド・クーバー『家族の死』塚本嘉壽・笠原嘉訳、みすず書房、1978年)。
- 14) 論文内では説明が記されていないSemioteknikについて、前述のケラーは、マールバッハ・ドイツ文学資料館

- のキットラー手稿史料における「Semioteknikは、作品を構造化し、そしてその作品の受容条件を規格化する」という一節を提示している。Köhler, *Mediengeschichte schreiben*, S. 233.
- 15) Philippe Ariès, *Geschichte der Kindheit*, München, 1975, S. 553.
- 16) 以下の節題は、1977年キットラー論文の節題と対応する。
- 17) なお本稿の性質上、以降のレッシング演劇からの引用テキストは全て、1977年キットラー論文を典拠とする。
- 18) ここでキットラーが参照するラカンの「家族」においては、以下の様に近代家族が示されている。「近代の家族が構成する縮小した集団は、実際、検討してみると、家族制度の単純化としてではなく、むしろその矛盾として表れている。[松井略] 婚姻は、家族から区別しなければならない制度である。」Vgl. Jacques Lacan, *Die Familie*, in: Norbert Hass (Hrsg.), *Schriften*, Bd. III, Freiburg, 1938/1973-1980, S. 43f. (ラカン『家族複合』宮本忠雄・関忠盛訳、哲学書房、1986年、19-20頁)。なお、ラカン「家族」について、キットラー自身が翻訳者の一員となり、1980年にドイツ語訳を出版している。1991年の再録時にはドイツ語訳書が典拠となっており、本稿では主にドイツ語版を参照した。
- 19) 書名のみを参照であるが、キットラーは Talcott Parsons/ Robert Freed Bales, *Family, Socialization and Interaction Process*, Glencoe, 1955を挙げている。なお本書では、家族の「父親と母親の役割の分化」に力点が置かれており、父に関しては「家族に対する道具的な責任 (instrumental responsibility) ははっきりと一人の成人男子家族員に焦点づけられるものとして、母に関しては「長時間夫・父が家庭にいないことから、彼女 [母] が子どもについて主な責任を負う存在として、それぞれ父と母が位置づけられている。Vgl. Parsons/ Bales, *Family*, p. 23 (T・パーソンズ、R・F・ベールズ (橋爪貞雄他訳)『核家族と子どもの社会化 (上)』黎明書房、1970年、45頁)。
- 20) この文章の注釈で、キットラーはラカン「フロイトの(衝動)と精神分析家の欲求について」の以下の言葉を直接引用している。「人間がいつまでも母親の性的な奉仕に繋がれていないのは、(父親-の-名)のおかげであり、(父親)に対する攻撃が(掟)の始原にあり、(掟)は、それが近親相姦の禁止によって生じさせる欲求に仕えている」。Lacan, *Du »Trieb« de Freud et du désir du psychanalyste*, in: *Ecrits*, Paris, 1966, S. 852 (ラカン『エクリIII』佐々木孝次他訳、弘文堂、1981年、382頁)。これにつづけて、キットラーは注釈内で「レッシング演劇の家族において攻撃が欠落しているということは、議論されるべきことである」と補足している (S. 119)。
- 21) キットラーが用いる「純粋な記号表現」は、論文注釈で明示されているように、ラカンからの引用である。「出産の役割が父親に与えられることがある純粋な記号表現からの、現実の父親ではなく、宗教がわれわれに対して〈父親-の-名〉として援用するように教えたものからの結果としてでなければありえないのを示している」(Lacan, *Über eine Frage, die jeder möglichen Behandlung der Psychose vorausgeht*, in: *Schriften*, Freiburg, 1973-1976, II, S.89 = ラカン『エクリII』佐々木孝次他訳、弘文堂、1977年、320頁)。
- 22) Karl Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, in: Hans-Joachim Lieber (Hrsg.), *Werke*, 2. Aufl. Darmstadt, 1844/1971, S. 554. (マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登訳、岩波書店、1964年、76頁)。
- 23) キットラーはカントの1803年の著作である「教育学」の「人間は教育されなければならない唯一の被造物である。[松井略] 人間は教育によってはじめて人間になることができる」を参照している。Kant, *Über Pädagogik*, in: *Königlich Preußische Akademie der Wissenschaften (Hg.), Kant's Gesammelte Schriften*, Berlin-Leipzig, Bd. IX, 1803/1923, S. 1-8 (『カント全集17』岩波書店、2001年、217-221頁)。
- 24) この文章につけられた注釈で、キットラーはアリエス『〈子供〉の誕生』への参照指示を行っている。この頁でアリエスは「夫婦のエネルギー全体が、自発的に数が減らされた子孫の出世に向けられるこの近代的な生活にあって、いったい何がそもそも個人主義的なのか、問わなければならない」と述べる (Ariès, *Geschichte der Kindheit*, S. 557)。
- 25) Lacan, *Die Familie*, S. 76 (ラカン『家族複合』105頁)。
- 26) Michel Foucault, *Psychologie und Geisteskrankheit*, Frankfurt a. M., 1970, S. 122f.
- 27) キットラーが参照する頁で、フロイトは以下の様に述べる。「自我理想は、人間の内にある交渉なものへと向けられたあらゆる欲求を満たすものである。それは父親憧憬に代わる代替形成物として、あらゆる宗教形成のもととなった萌芽をはらんでいる。[松井略] 父親の役割は、ひき続き教師や権威者たちに引き受けられ、彼らの命令や禁止が、理想自我のなかに強大な力となって存続し、ついには良心となって道徳的検閲を実施するにいたる」

- (Sigmund Freud, *Das Ich und das Es*, *Gesammelte Werke. XIII*, London, 1946-1958, S. 265 = フロイト「自我とエス」『フロイト全集18』岩波書店、2007年、34頁)。
- 28) ここでキットラーは、ラカンの弟子の一人であり、ヘーゲル『精神現象学』のアラビア語翻訳者として知られるムスタファ・サーファンの『オイディプス研究』の一節を参照する。「その構造は想像的なものである…理想の父はひとりしかおらず、各人がそれぞれのやり方で作り上げるものである」。Vgl. Moustafa Safouan, *Études sur L'Œdipe*, Paris, 1974, S. 46.
- 29) 書名のみであるが、キットラーはレヴィ=ストロース『親族の基本構造』(原著1949年)を参照している。
- 30) Safouan, *Études sur L'Œdipe*, S. 137.
- 31) もっとも、このやや性急な締めくくりにつけられた注釈を見なければ、文章の含意は掴みにくい。キットラーが参照指示するHermann Lang, *Die Sprache und das Unbewusste*, Frankfurt/M, 1973, S. 211 (=ヘルマン・ラング『言語と無意識』石田浩之訳、誠信書房、1983年、195頁)には以下の記述がある。「残されたことは、彼を我々の「父の名のなかに」招聘することである。しかし、彼は殺害され命名を免れた父親なのだから、この招聘は、「父の名」という能記が再現表象する空所に送り返すものでしかありえない。すべて父親は、彼が根本的な不在性を現前化するような位置を占めるかぎりでのみ、すなわち欠如を本質的に身にまわっているかぎりでのみ、父親なのである」。
- 32) レヴィ=ストロース『親族の基本構造』が、ラカンならびにフランス精神分析界に与えた影響については、荒谷大輔『ラカンの哲学』講談社、2018年、54-91頁を参照。
- 33) 「訳者あとがき」、クーバー『家族の死』、228頁。なお、1960年代後半のフランス精神分析界とデイヴィッド・クーバーの関わりについては、上尾真道『ラカン 真理のバトス』人文書院、2017年、42-53頁を参照。
- 34) クーバー『家族の死』、211頁。この時に参照される文献は、Philippe Ariès, *Wills, Tombs and Families*, *New Society*, 25, 1969, pp. 473-475.
- 35) 鳥光美緒子「近代社会と子ども観——最近の子ども史研究の動向から」『教育学研究』48(3)、1981年、41頁。
- 36) ヴァン・デン・ベルク『メタプレティカ』早坂泰治郎訳、春秋社、1986年、15-33頁。
- 37) この論文は、キットラー自身が論考「詩人・母・子ども」(1978)の冒頭で参照している。松井健人「初期キットラーにおける家族と教育、あるいは家庭教育の誕生」、138頁。
- 38) ベルク『メタプレティカ』、124-125頁。
- 39) このようなキットラーの教育理解の基本線は、後年の『書き込みシステム1800・1900』ならびに1988年の「公務員としての主体」にまで見られる。参照、中村徳仁「1980年代西ドイツにおける〈主体〉をめぐるディスクルス」『メディアム』(1)、2020年、90頁。
- 40) Friedrich Kittler, *Baggersee. Frühe Schriften aus dem Nachlass*, Paderborn, 2015, S. 35.
- 41) Friedrich Kittler, *Aufschreibesysteme 1800-1900*, 4. Auflage, München, 1985/2003, S. 35-86.
- 42) 参照、田邊玲子「訳者解説」レッシング『エミーリア・ガロット』ミス・サラ・サン普森』岩波書店、2006年、349-350頁。
- 43) フリードリッヒ・キットラー、シュテファン・パンツ『キットラー対話』前田良三・原克訳、三元社、1999年、76頁。
- 44) 宮澤康人「〈父〉殺しの教育学」『教育学研究』68(4)、2001年、371-384頁；北本正章「ヨーロッパ史における父親像と父性の社会史的系譜に関する比較教育思想論的考察(その1)、(その2)」『教育人間科学部紀要』(3)、2012年、59-71、72-86頁などを参照。
- 45) 参照、松井健人・原田拓夢「教育とエビデンス」論議の構成要件解明のための教育思想史的研究——ペスタロッチとモンテッソーリの幼児教育思想に着目して』『東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要』(5)、2019年、61-67頁。また、キットラーも後年の『書き込みシステム1800・1900』の有名なセクションである「母の口」において、ペスタロッチを扱っている。参照、松井健人「初期キットラーにおける家族と教育、あるいは家庭教育の誕生」、136-148頁。
- 46) 小玉亮子「教育における母なるものの呪縛——ジェンダー視点にたつ歴史研究から」『近代教育フォーラム』(25)、2016年、131-133頁。